虫の目 鳥の目 魚の目
MUSHI NO ME TORI NO ME UO NO ME

近代土木建造物で初の国宝が誕生 万博建築を残し将来の文化財候補へ

千尋 Chihiro

学生の頃、修学旅行で価値もわからず見学した古都の社寺を、建造物に注目しながら再訪している。約二〇年かけてゆっくりと京都を巡っているが、京都市の東側にある臨済宗南禅寺派の大本山「南禅寺」（京都市左京区）は幾度も訪ねたくなる寺院の一つだ。

境内全体が国の史跡に指定されている。美しく豊かさをもった建築様式が見られる国宝「方丈」や、石川五右衛門の「絶景かな。絶景かな」で知られる重要文化財（重文）「三門」、狩野探幽筆の襖絵「水呑の虎」、国名勝の方丈庭園など、見どころも豊富。季節ごとに表情を変えるので、一回や二回の訪問では到底味わい尽くせない。

境内を横切る赤レンガ造りの一四連アーチの水路橋は、修学旅行の時から印象深く記憶に残る。室町時代の歴史を現代に残す南禅寺にありながら、一風変わって近代の香りが漂う。ローマ帝国の水道橋を連想させる堂々たる姿から、「水路閣」と呼ばれる。その曲線美を描く赤レンガのアーチは、南禅寺の和風建築にマッチし、独特な雰囲気のある美しさを湛えている。水路閣は近付いて触れる。近くの階段を登ると水路閣を上から眺めることもできる。

南禅寺水路閣は琵琶湖疎水を構成する施設の一つ。琵琶湖疎水は一八九〇（明治二十三）年の竣工以来、豊かな水の恵みで京都市民の暮らしを守り、まちの産業や文化を支え、水道、水力発電、舟運、灌漑、庭園、防火用水など総合的な役割を担ってきた。このほど文化審議会（文化審）が琵琶湖疎水施設を国宝、重文に指定するよう文部科学大臣に答申した。

重文に指定される施設は、大津市から京都市にかけて二四カ所。このうち国宝は五カ所（第一隧道、第二隧道、第三隧道、インクライン、南禅寺水路閣）が指定される。答申では「西洋技術の習得過程にあった明治中期に、当時の土木技術の粋を集めて築かれ、世界的に高い評価を得た類い稀なる構造物であり、明治日本における都市基盤施設の金字塔」と高い評価を受けた。近代の土木建造物としては初めての国宝となる。

デザイン力でサイクル回す

文化審は今回、建築家の菊竹清訓さん（一九二八～二〇一一年）が弱冠三十歳で完成させた自邸「スカイハウス」（東京都文京区、五八年竣工）を、戦後に竣工した住宅で初めて重文に指定するよう答申している。スカイハウスは四枚の壁柱で床を持ち上げ、シェル構造の屋根を架けたRC造の住宅だ。四間四方（七・二㍍×七・二㍍）の主室の周囲を、バルコニーのような廊下が巡る構成。長期の使用を想定する躯体に対し、キッチンやトイレなどの設備を更新可能な「ムーブネット」と捉え、ユニット化して部屋の外に取り付けた。

ムーブネットは設備だけにとどまらない。菊竹夫婦に子どもが生まれると、子ども部屋をムーブネットとしてつくり、主室の階下にぶら下げた。水回りのムーブネットは何度か交換され、子ども部屋も一時期は二つに増えたそうだ。家族構成の変化とともに子ども部屋は取り外され、その下にあった庭を埋める形で次第に増築が行われていった。

スカイハウスは社会の変化に伴い成長する建築・都市のあり方を追求し、後の建築運動「メタボリズム」に通じる建築思想「とりかえ可能な住宅」を具現化している。菊竹さんがその造形力を存分に発揮した独創的で洗練された代表作の一つと言えよう。

二〇〇八年四月、菊竹さんの八十歳を祝う誕生会が開かれた。教え子たちの活躍に触れ「私も負けないように頑張っていきたい」と笑顔で話し、「これからはコンセプトの時代に入っていく。その中心は建築を取り巻くモノやコトの考え方だ」と力強く語っていた。建築が脱炭素や防災・減災、デジタルなど多様で複雑なニーズに応える時代が来ることを示唆していたのだろう。

政府は六月三日に決定した知的財産推進計画で、知的資本を生かし国内外の社会課題の解決を図る新たな知的創造サイクルの構築を掲げた。建築も著作権法で保護される知財であり、サイクルの一部を担う。菊竹さんは「思考や考え方が世界を制覇していく」とも話していた。社会に適した建築を徹底的に追求しデザインする力こそが知的資本となり、サイクルを回す原動力になる。

太陽の塔から大屋根リングへ

一九七〇年大阪万博のシンボルとして親しまれている「太陽の塔」（大阪市吹田市）も国の重文に新たに指定される見通しだ。太陽の塔は万博テーマ「人類の進歩と調和」を表現するパビリオン。芸術家の岡本太郎さん（一九一一～九六年）のデザインを忠実に具現化するため、当時最先端の技術を結集して建設された。高度経済成長期の日本を象徴した大阪万博の記念碑となるレガシー（遺産）だ。

開催中の大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、世界各国のパビリオンや多彩なイベントが多くの人を惹き付けている。その一つが会場シンボルの「大屋根リング」だろう。一周約二キロ㍍、高さ一二～二〇㍍、外径約六七五㍍と世界最大の木造建築物としてギネス世界記録に認定された。建築家の藤本壮介さんは世界の分断が深まるなか、「リング内に各国のパビリオンが入り『世界がつながる』というメッセージを強く伝える象徴的な存在」と設計意図を説いている。

過去に日本では五回の万博が開かれ、ほぼすべての施設が取り壊された。短期間の使用が前提だったからこそ実験的な建築を実現できたとも言え、近代建築の進化に大きく貢献してきた。大屋根リングもまさに実験的で挑戦的な建築プロジェクトだ。その一部を保存する方向で大阪府・市らが調整している。維持費確保がネックで見通しは不透明だが、レガシーとして次代に残す価値はあるだろう。

パビリオンなどの保存や活用を求める声がなかなか上がらないなか、一部でも大屋根リングを残そうという動きが出てきた。未来の文化財候補になるだろうか。随分と先の話になるが、気長に期待しながら待ちたい。